聖グレゴリオの家
宗教音楽研究所
教会音楽科
音楽の原点に学ぶ

聖グレゴリオの家 教会音楽科紹介

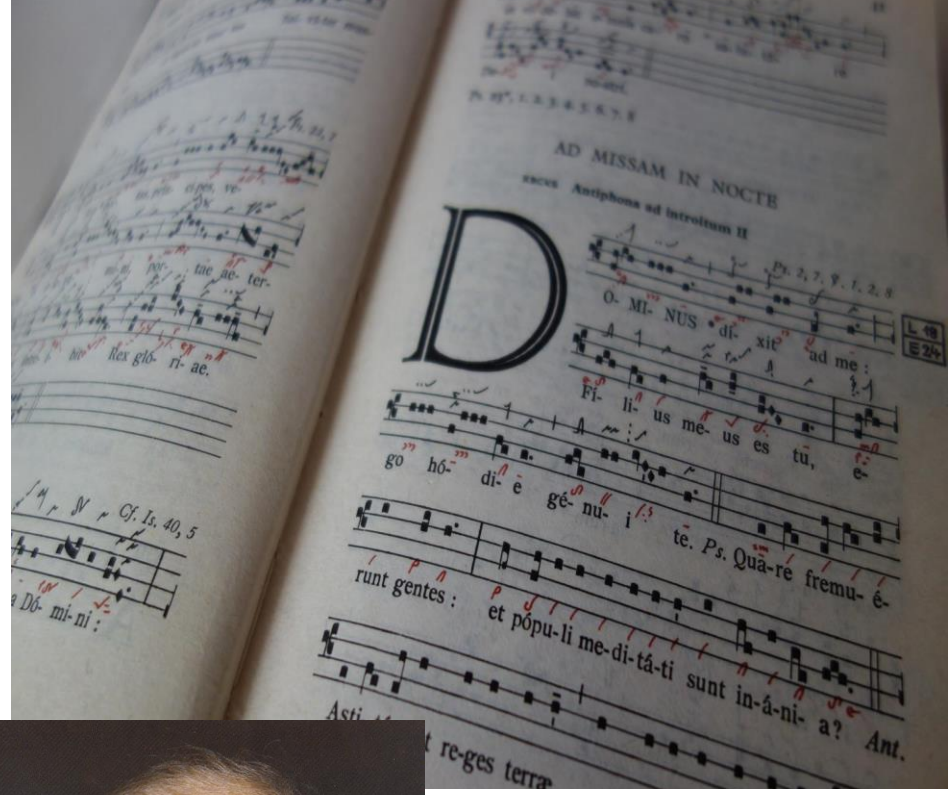
1. 理念と目的
2. 教会音楽科の学習
3. 学習環境
4. 資料室
5. 生徒の声
6. 同窓会
7. 今後のスケジュール

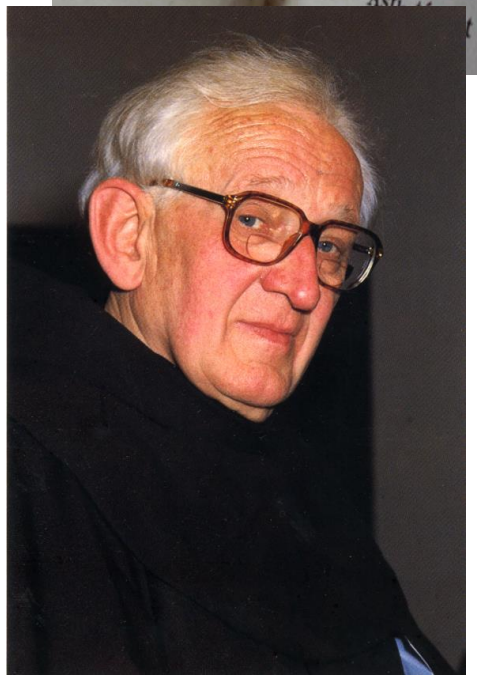
1.理念と教育方針

聖グレゴリオの家創立者 ゲレオン・ゴルドマン神父のことば

『典礼憲章』6章115条（音楽教育）「音楽に関する教育と実践が、神学校、男女修道会の修練院、修道会神学校において、さらに、他の教育機関とカトリック学校において重要視されなければならない。このような教育を実践するために、教会音楽の教授に携わる教師が注意深く養成されなければならない。そのうえ、適当な場合には、教会音楽に関する高等研究機関を設立することが勧められる。音楽家、聖歌隊員、特に少年聖歌隊員には、真実の典礼教育も施さなければならない。」

教会の宝とされている、教会の伝統あるさまざまな音楽が教会から段々と見放され、教会以外で盛んになっていくのにしたがって教会音楽家の養成、教会音楽の保存、また日本において独特の教会音楽の発展と典礼教育のための研究所の必要性を強く感じ、その設立実現の計画を企てました。





1.理念と教育方針

聖グレゴリオの家 宗教音楽研究所長 橋本　周子

聖グレゴリオの家は、教会音楽の研究、保存、普及を目指して1979年に設立いたしました。以来、大変にゆっくりとした歩みではありますが、祈り、研究、教育の三本の柱を中心としてその目的に向かってさまざまな可能性を試みてまいりました。

キリスト教の典礼と典礼音楽を考えるとき、欠かすことのできないグレゴリオ聖歌をはじめ、キリスト教会が宝庫としてきた音楽の保存、私たちにとっての賛美の音楽の在り方、特に日本の文化、伝統をふまえたうえでの賛美の可能性を探してまいりました。新しいものを追求し、現代に対応していくためにはわれわれの持っている伝統文化—しかも地方色にとらわれない—の上に立ってこそ何かを見出せると考えているからです。

「教会音楽の真の目的が、神の栄光と賛美、信者の聖化にあることを思うとき、その実践の前に、永遠の神への礼拝ー祈りーなくして、その真髄に達することは出来ないでしょう。日々止むことなく捧げられる礼拝から、すべての活動が流れ出るのです。」

これは聖グレゴリオの家の創立者故ゲレオン・ゴルドマン神父の、設立に当たっての言葉です。典礼行為は人間の行いの中でもっとも尊い行為であり、音楽はそこから生まれ、発展してきたものであるということに創立者は徹底しておりました。

以来、ローマカトリックの典礼を守りながら、研究、保存、普及、教育にと試行錯誤を重ねて今日にいたっております。創立当初から宗教・宗派を超えて多くの方々との関わりの中でその活動を続けていることも、この家の特色と言えるでしょう。芸術は人類共通の財産であり、音楽は人びとの心と霊の言葉であり、糧となるものです。ここに境はありません。ここに調和の営みを見出したいと望んでいます。

現在200名近くいる教会音楽科の修了者が、それぞれの立場で充実した活動を続けていることは大変に喜ばしいことです。

2005年11月30日聖グレゴリオの家は教皇庁の承認を得て、ドイツ国立レーゲンスブルク教会音楽・教育音楽大学と提携を結びました。この提携により、「教会音楽B」の学位（ドイツ国家教会音楽家資格）と「教会音楽C」の資格が日本においても取得できるようになりました。

教会音楽家としての資格は、日本の社会において専門職としては成り立ちませんが、その資格を得ることによって教会音楽に対して確信を持ち、教会音楽家としての責任ある務めを果たすことができるようになると考えております。また学ぶ人にとっては、ドイツ国立レーゲンスブルク教会音楽・教育音楽大学との交流の可能性も生まれ、大きな目標と励みになることと思っております。

将来に向かって：研究所発足以来、典礼を祝いながら、教会音楽の普及と保存、教育そして日本における教会音楽の可能性の模索という3点を中心に活動を始めて45年が過ぎようとしています。これからの課題として、特に教会音楽科の改善など、聖グレゴリオの家は幾多の問題を抱えています。時代とともに私たちは前進しながら、次の世代に伝えていく努めもあります。多くの人びとのために学ぶ場を広げていかなければなりません。祈りと音楽をとおして、人びとの安らぎの場となることを願っています。

2.教会音楽科の学習

- 学習期間（29週）
  - Ⅰ期：9月～11月
  - Ⅱ期： 1月～3月
  - Ⅲ期： 4月～6月
- 本科： ３年
- 専攻科： ３年
- 資格試験

- 水曜日／木曜日
- 「朝の祈り」から始業へ
- 午前：共に学ぶ
  - グレゴリオ聖歌
  - 合唱クラス
- 午後：個人レッスン
  - オルガン
  - 声楽
  - 和声

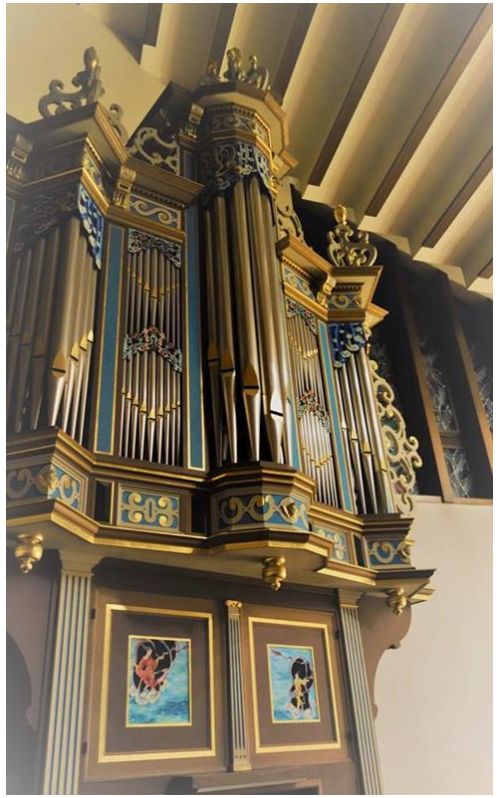
３.講師陣の紹介

教会音楽科講師紹介と講義要項はウェブサイトにあります

- グループで学ぶ
  - グレゴリオ聖歌
  - 合唱・合唱指揮
  - 教会音楽史
  - ソルミゼーション
  - 典礼を実践する
- 特別授業
  - シスター岡立子先生
  - 田中裕先生　他
- テーマ
  - 典礼学
  - その時のトピック
- 個人レッスン
  - 声楽
  - オルガン
  - 和声
  - 通奏低音
  - 即興演奏
- 発表会
  - 合唱、オルガン、独唱
  - 演奏会（現役生：5月下旬）
  - 修了演奏会（卒業生：6月下旬）

4.学習環境～響きとともに～空間と楽器

- 聖堂
- 音楽室
- ハッチハウス



- 楽器
  - オルガン他

4.学習環境～響きとともに～空間

- 聖堂
- 練習室
- チェンバロ室

1. 聖堂

当法人の聖堂が建設された1970～80年代当時は、ミサ聖祭の形態が大きく変化してからそれほど時を経ていない頃でした。それまで、司祭が会衆を代表した形の「背面形式」であったミサ聖祭が、司祭と会衆が祭壇をはさむ「対面形式」になり、司祭と信徒が祭壇を囲んで「キリストと共に父なる神に賛美を捧げる」という形式に変わった時期でした。

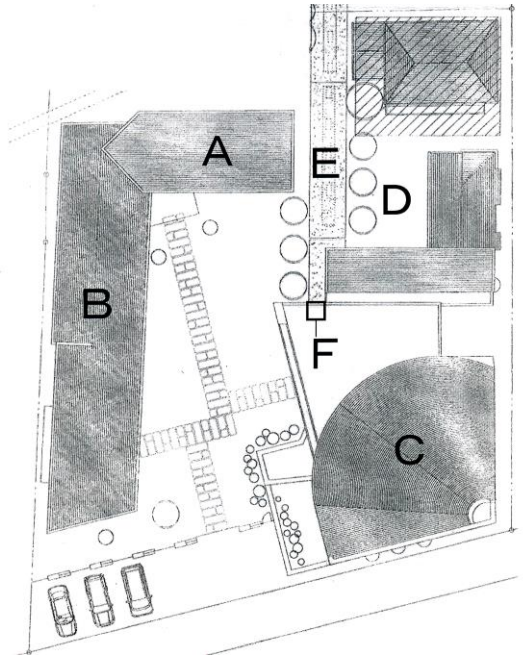
座席と天井のカーブは同心円ではなく、扇の要の地点はひとつのカーブごとにその中心点が移動し　次第に外側に移ることにより、祭壇での出来事が、池のさざ波のように外に広く伝わる様を表現しています。

また、聖堂の屋根はシェル構造になっています。シェル構造は、貝殻のように典面構造で、テントの屋根のように周囲の壁が吊り上げることにより、屋根の構造を軽くすることができます。

また、曲面天井に描かれた波状の曲線が、この聖堂の最大の特徴となっています。

設計者は長島正充、施工は親建会工務所が当たりましたが、特にこの聖堂は設計とともに施工上の困難については言うまでもなく難工事でありました。

4.学習環境～響きとともに～空間



2. 伽藍配置

聖堂･修道院･レッスン室･宿泊等、複数の目的を兼ねる建築を、わずか550坪(1800㎡)の土地に完結させることは、きわめて難しいことです。施主側の担当者として、建築家とすべての問題について議論を尽くし、3年以上の時間をかけ、完成させました。

結局、「祈り」「音楽」「宿泊」の3要素から発生する機能を具体化することですから、活動を伴った　ひとつの社会を設計することに等しかった訳です。

空間の要素を大きくふたつに分けると、霊的活動と教育活動とに分類することができます。異なるふたつの空間の境に回廊を置き、雰囲気を分けました。

異なる空間の交差点に鏡廊を立て、伽藍配置の考え方は完了しました。

キャンパスの配置は

Ａ・Ｂが教育活動ゾーン（レッスン室・宿泊室・食堂等）。

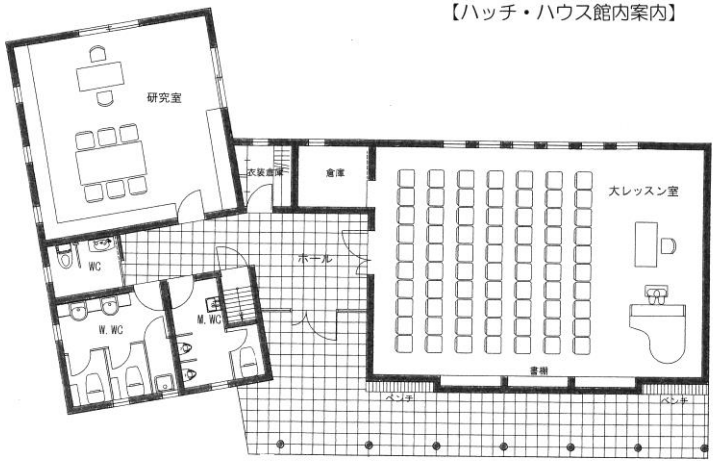
Ｃ・Ｄは霊的活動ゾーン（聖堂・修道院等）。

Ｅの回廊はふたつのゾーンを感覚的に区別する役割があります。

祈りと修道生活と教育活動の交差点にＦの鐘楼を配置しました。狭い敷地に多くの異なる活動目的を混在させるため、正面の庭と奥の中庭に分離することによって逆に落ち着いた伽藍配置にしています。

- 聖堂
- 練習室
- チェンバロ室

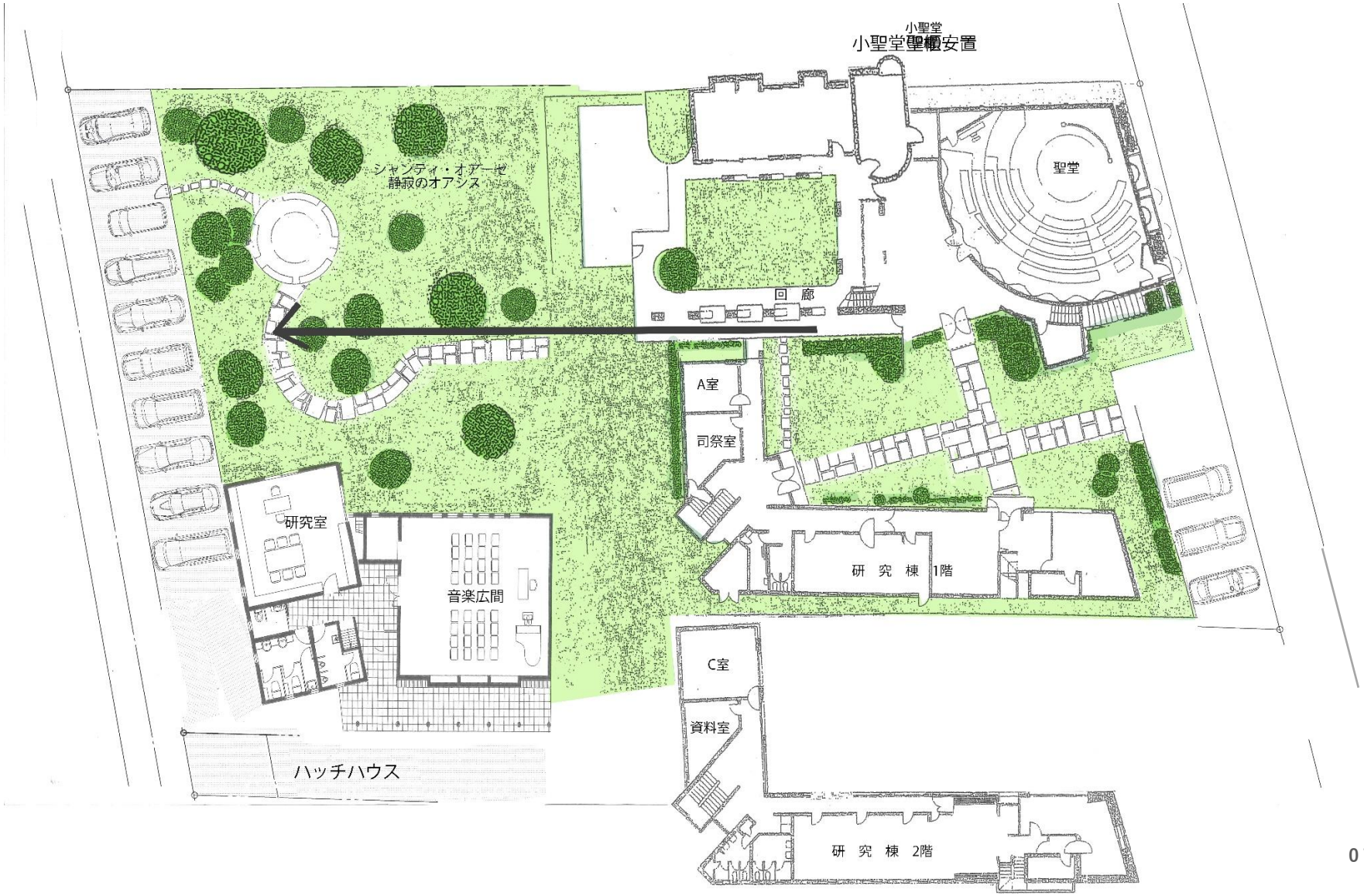
4.学習環境～響きとともに～空間



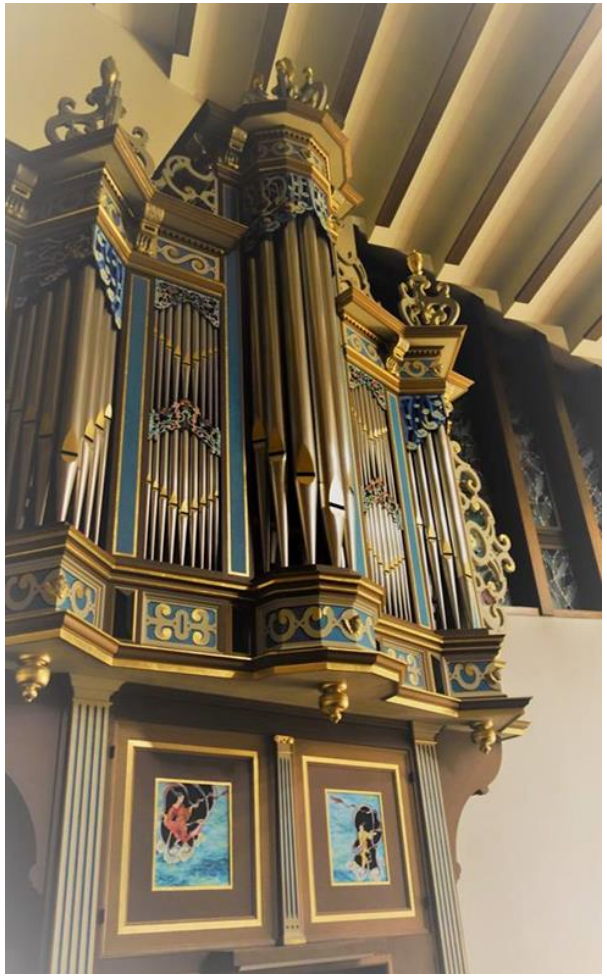
ハッチハウス音楽広間

聖グレゴリオの家の建設にあたって、当初すべてのスペースは総勢20～25人を基準に設備設計をしておりましたので、近年はレッスン室の不足に悩んでおりました。早速に増築の計画が始まりました。増築募金委員会を結成し目標額4千万円として広く募金を募ることにいたしました。我々の予想をはるかに超えて、多くの方の援助、協力をいただき、またケルン大司教区からの援助もあって、結局は総額6千万円で新棟シャンティ・ハウスは完成いたしました。この家は通称“ハッチハウス”と呼んでおります。聖グレゴリオの家の建築は最初から親建会にお願いしておりましたので、親建会の2代目社長市野修氏のおかげできれいな建物が完成いたしました。建物全体は当初の計画より縮小せざるを得なかったのは残念でしたが、グレゴリオ聖歌研究室と音楽広間の二つのスペースからなり、音響の武本毅氏の協力を得て、演奏に、講義に、また時間ごとの祈り等、理想的な響きの中で毎日フルに活用しております。”音楽広間”と、グレゴリオ聖歌研究室の方は“ヨッピヒ・ツィンマー（ヨッピヒ室）”と名付けました。聖グレゴリオの家はヨッピヒ先生の教えを基本においてグレゴリオ聖歌の学びと研究を続けているからです。彼は3回にわたり日本に来られ、聖歌隊と2回、声楽アンサンブル・ファヴォリートと2回、計4回もわたくしたちとCD制作に携わってくださいました。彼の指導による教えは、わたくしたちのグレゴリオ聖歌の貴重な土台となっているのです。ヨッピヒ先生はこの部屋のことを大変に喜んでくださっております。

4.学習環境～響きとともに～空間

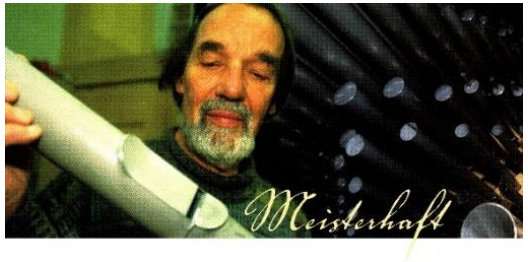


4.学習環境～響きとともに～楽器
オルガン



アーレントオルガン

世界に誇るアーレントオルガンは、土地購入直後にユルゲン・アーレント氏に製作を依頼し、8年後の1987年に完成しました。演奏会用ではなく礼拝に適したオルガンです。オルガンのオーナメントは日本人の手によるものにしたい、というアーレント氏の希望により日本でつくられました。20世紀における、17世紀北ドイツバロック様式と、古代天平白鳳時代の文化との出会いととらえ、薬師寺、平等院鳳凰堂のレリーフ等を参考にオルガンのオーナメントの装飾を考えました。七宝で楽器を奏でる天女たちのモチーフは、奈良薬師寺三重塔からそのアイディアを受けたものです。ちなみに各音栓の名前の七宝は、創立者ゲレオン・ゴールドマン神父の直筆によるものです。（七宝　原案：橋本裕臣　制作：橋本民子）



I Hauptwerk　C – f^3

Praestant	8'
Gedackt	8'
Oktave	4‘
Spitzgedackt	4‘
Oktave	2‘
Nasat	1⅓‘
Cornet III (ab c)	
Mixtur III	

II Brustwerk　C – f^3

Holzgedackt	8'
Holzflöte	4'
Waldflöte	2'
Sesquialtera II	
Regal	8'

Pedal　C, D – d^1

Subbass	16'

Tremulant für das ganze Werk

I–P, II–P
Mechanical action　14 stops　901 pipes
Wohltemperiert
平行ペダル

オルガン

オーベルタンオルガン

製作　B.オーベルタン･オルガン製作所（フランス）
Bernard Aubertin（France）

設置年月　1993年3月

I Positif　C – f^3

Bourdon en bois	8'
Flûte à cheminée	8'
Doublette	2'

II Grand-Orgue　C – f^3

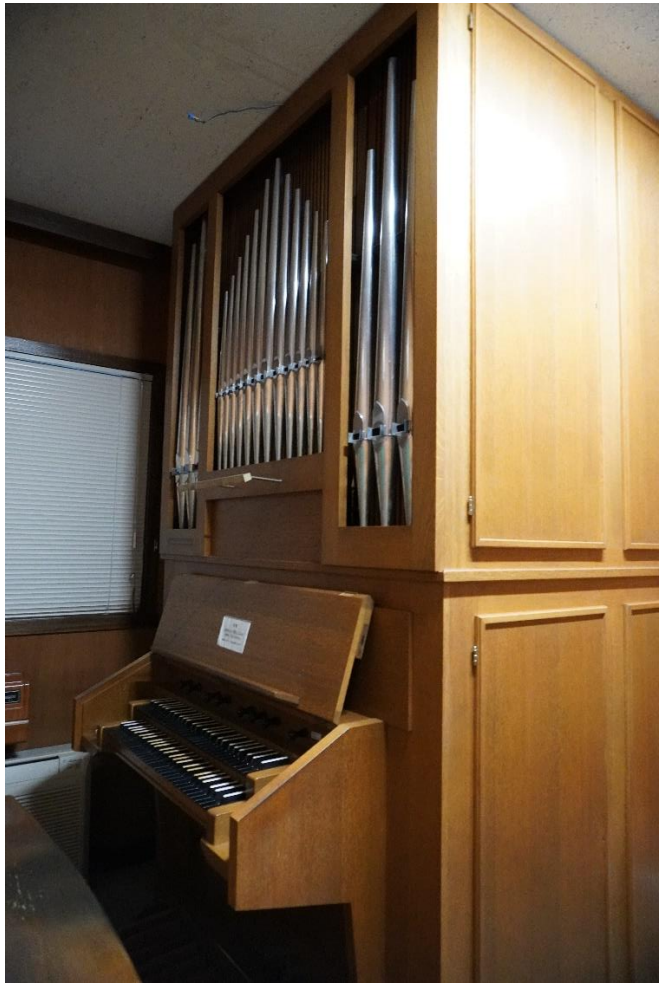
Suavial	8'
Fugara	4'
Nasard (B/D)	3'
Régale (B/D)	8'

Pédal　C – f^1

Flûte	8'

Tremblant
I–II, I-P, II-P
Mechanical action

オーベルタンオルガン



ザイフェルト＆ケヴェラールオルガン（1982年 ケルン司教区より寄贈）

オルガン

ガルニエオルガン

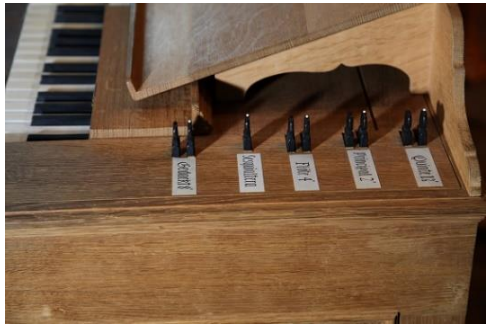
設置年月　　1993年3月

ポジティフ・オルガン

ポジティブオルガン（ユルゲン・アーレント製作）

Quinte	1⅓'
Principal	2'
Flöte	4'
Sesquialtera	
Gedackt	8'

分割ストップ



ポジティブオルガン（エティエンヌ・ドゥベジュ 1993年）

ポジティブオルガン（草刈徹夫 1983年）

ハルモニウム／チェンバロ

ハルモニウムオルガン（デュモン社　1856年）

パリミッション会のアンリ・ドマンジェル神父（1892年来日、関口教会司牧）ゆかりの楽器。長らく神田教会のミサで用いられ、佐藤光幸神父に愛されたオルガンです。佐藤神父の帰天後、白柳枢機卿の書斎に置かれていましたが、その後、聖グレゴリオの家に寄贈されました。

ハルモニウムオルガン（ロドルフ社　1800年代半ば）

札幌北一条教会が札幌教区の司教座に指定された時、司教に任命されたドイツ・フランシスコ会フルダ管区出身ヴェンツェス・キノルト神父（1907年来日）がフランスから購入なさいました。屋根裏に忘れられ埃を被った時期もありましたが、最終的に聖グレゴリオの家にたどり着きました。（1988年 中川潤子氏より寄贈）

チェンバロ（ウィリアム・ダウド社　1974年）

チェンバロ（堀栄蔵　1983年）

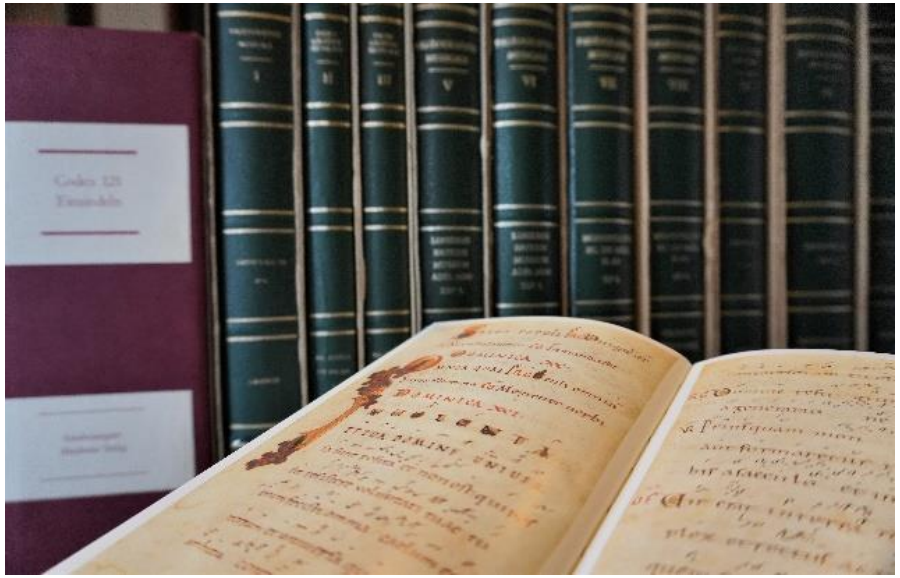
チェンバロ（久保田彰　1988年）

5.資料室

資料室には、聖グレゴリオの家の研究・教育活動を支えるための2つの収書方針の柱があります。一つはキリスト教および西洋古楽に関する基礎的参考書、もう一つは教会音楽関係楽譜（宗教声楽曲、合唱曲、キリスト教諸派の聖歌本、オルガン曲）です。

楽譜総数は約8700点ですが、特に研究者用の全集・叢書楽譜（ファクシミリのシリーズも含む）などは最新の情報による良質なエディションが揃っています。約930冊の書籍は、すべて開架式で、誰でも手にとって見ることができます。楽譜検索のためにカード目録を完備していますが、分野別の蔵書目録は当資料室司書の解題つきで作成されています。

資料室の利用にあたっては、専門の司書によるレファレンスサーヴィスを受けることができます。また、月に1回のペースで「資料室だより」を発行し、新刊の案内および旧刊の紹介を行っています。さらに、音楽図書館協議会のネットワークを通じて他館とのリソースシェアを行ない、国際的な視野で情報収集に努めています。



5.資料室

・単旋律音楽楽譜目録

Monumenta Monodica Medii Aevi をはじめとする学問的エディションを収集しています。地方典礼や様々なヴァリアントを含むイムヌス、古ローマ聖歌も含まれます。また他のシリーズからピックアップした楽譜としては、ノナントゥラ記譜法による典礼音楽楽譜集があります。聖人固有の特殊な聖務日課も研究用に収集しています。

・グレゴリオ聖歌楽譜

角型記譜法、および古ネウマによる聖歌本を収集するほか、グレゴリオ聖歌の古文書学的な研究の基礎となる古写本の集成 Paléographie musicale も完備しています。ドミニコ会、フランシスコ会などの修道会別の固有の聖務日課書を所収していることも当資料室の特徴の一つです。

・典礼用聖歌楽譜

実際の典礼、礼拝の利用に供する聖歌・賛美歌集は、教派を超えカトリック、ロシア正教、聖公会、プロテスタント諸派（テゼ共同体、アイオナ共同体も含む）から収集しています。明治時代以降の聖歌集も多く保管されています。明治時代以降の聖歌集は宗派を問わず出版されたものすべてをファクシミリで見ることができます。

・日本人による宗教音楽作品

日本におけるキリスト教音楽の研究所としての使命を考慮し、日本人によるキリスト教音楽作品の出版楽譜、自筆楽譜収集に努めています。

・器楽に関する洋書

この分野で特筆すべきものとしては Documenta Musicologica があります。ガナッシ、マテゾン、プレトリウス、クヴァンツ、ヴィルドゥング、コクリコなどルネサンス・バロック期の音楽研究に欠かせない一次史料のファクシミリ群です。

6.同窓会

- これまでに卒業生は200名弱
  - 教会オルガニスト
  - 聖歌隊指揮者
  - オルガニスト
    - 他　多彩な場で活躍しています
- 定期的に同窓会
  - 継続的な交流の場として
  - 新たに学ぶ機会

7.今後のスケジュール

- 教会音楽科演奏会（現役生）
  - 5月26日（日）14:00-
- 修了演奏会（卒業生）
  - 6月23日（日）14:00-
- 申込み手続き
  - 願書
  - 歌
  - ピアノ
  - 面接
- 2024年度面接
  - 1次：7月7日（日）14:30-
  - 2次：9月1日（日）14:30-
- 2024年度開始
  - 9月17日（水） 18日（木）
  - 水曜日・木曜クラスの選択